

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19530174

研究課題名(和文) 社会主義の諸理論とソヴェト体制：思想と政策の相互作用に関する歴史的考察

研究課題名(英文) Theories of Socialism and the Soviet System: A Historical Consideration on the interactions between theories and policies.

研究代表者

森岡 真史(MORIOKA MASASHI)

立命館大学・国際関係学部・教授

研究者番号：50257812

研究成果の概要(和文): 本研究では、(1) 近代社会主義の規範的中核が、普遍的生存権および普遍的労働義務の追求にあったこと、(2) 労働義務を優先し、所得源泉としての私的所有の廃絶を追求する立場が社会主義の革命的潮流を形成したこと、(3) マルクス主義が社会主義の規範的側面を必然論と階級闘争によって包摂したこと、(4) ソヴェト体制は、財産所得廃絶と普遍的労働義務を達成した社会であったこと、(5) 生存権規範の可能性はなお汲み尽くされていないこと、を明らかにした。

研究成果の概要(英文): Through historical investigation of socialist thoughts and the Soviet system, this research clarified the following points. (1) The normative core of modern socialism consists of two elements: the pursuit of universal right of existence and universal obligation of labor. (2) Revolutionary currents of socialism made universal labor obligation a primary concern and sought abolition of private property as a source of income. (3) Marxism wrapped the norm of labor obligation in historical inevitability and class struggle. (4) The Soviet system was a society which realized abolition of property income and universal labor obligation. (5) Possibility of socialism as the pursuit of universal right of existence has not been exhausted.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：経済学

科研費の分科・細目：経済学、経済学説・経済思想

キーワード：ロシア革命、経済体制論争、初期社会主義、生存権、労働義務、規範理論

1. 研究開始当初の背景

ソ連社会主義の失敗は一般に、それが依拠した社会主義思想の破産を示すものとみなされている。しかし、その場合の「社会主義」がいかなる思想を指し、またソ連はいかなる意味でこの思想に依拠していたのかは、必ずしも十分に理解されているとは言えない。例えば、19世紀半ばまでに形成された近代社会主義思想と、マルクス主義との間には、警鐘関係と並んで、いくつかの重大な相違が存在する。また、ロシア革命の形成過程では、マルクス主義あるいはレーニン主義だけでなく、ナロードニキ主義やアナキズムといった非マルクス主義的社会主義が大きな役割を演じた。さらに、革命の前後を通じてマルクス主義者自身の社会主義体制に関する観念に大きな変化が生じた。

このように、社会主義思想は、マルクス主義を含めて、多くの潮流からなる複合体であり、個々の潮流自身がまた、その内部に必ずしも相互に整合的ではない異質な要素を有している。ソヴェト体制は、巨視的には確かに社会主義思想に基づいて建設されたと言いうるが、そのことは、革命の指導者たちがあるべき固定的思想に依拠したことを意味するものではない。建設されるべき社会主義のビジョンは、革命それ自体の展開の中で変容した。

一方、社会主義に対する批判という点でも、ロシア革命以降の本格的な経済体制論争の展開に先立って、1870年代から、先駆的な探求が開始されている。

本研究課題は、以上の諸点について、ソヴェト体制の史的展開をふまえた思想史的考察を試みたものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、政治経済学における社会主義および社会主義批判の諸潮流と、旧ソ連の社会主義体制の関係について、前者が後者の形成・展開過程で果たした役割と、後者の存在が前者の発展に及ぼした影響の両面から

その相互作用を明らかにすることにある。

本研究課題は、社会主義をめぐる理論史としてみれば、社会主義思想の盛衰をその構成要素の多様性と異質性および体制との相互作用を通じた不断の変容の観点から動態的にとらえるという視点の設定において特徴をもつ。同時に、このような多様性と変容を貫く社会主義思想としての共通性の考察から、用語法や民族的外観の面での相違に隠された反資本主義・反市場思想の共通のプロトタイプを抽出するという狙いをもつ。また、社会主義批判の諸理論についても、現存社会主義との相互作用の文脈に置くことで、その発展過程をより内在的に理解することが可能になる。

ソヴェト社会主義論としてみれば、本研究は、体制の確立と維持における社会主義思想の役割を、システムの全一的な設計の指導原理ではなく、次々と生起する新たな困難に対応するための政策選択における参照枠組みおよびなされた選択の事後的正当化という文脈でとらえる意図をもつ。こうした把握は、ロシア革命をめぐる、共産党（レーニン、スターリン）の思想的計画性を強調する「意図主義」的解釈と革命後の試行錯誤過程を重視する「機能主義」的解釈の新たな統合に道を開くものである。

さらに、本研究は、直接には社会主義の思想と体制を主題とするものであるが、より一般的な文脈から特定の政治経済思想と政策選択や体制構築の関係を考えるうえで、一つのきわめて興味深い事例を提供するものと言えるであろう。最後に実践的・政策的諸問題との関係で一言付け加えれば、本研究課題の遂行は、社会主義体制の崩壊と資本主義の急速なグローバル化という近代史の到達点に立って資本主義の未来や改革可能性（およびその限界）を展望するという目的も有している。

3. 研究の方法

本研究課題でとった主要な研究方法は、文献資料の収集と読解である。資料の収集とい

う点では、機密解除資料に基づいて新たに示されたソヴェト社会主義に関する重要な事実をフォローし、また当事者であるロシアの革命家（政治家）や経済学者たち（亡命ロシア人を含む）の革命と社会主義をめぐる議論をたどるための資料・文献収集を、モスクワの両国立図書館、国立公文書館（GARF、RGAなど）、および国立国会図書館等で実施した。また収集した資料について、(1) 革命前の社会主義の理念と現実のソヴェト社会主義の関係、(2) 革命の展開過程における制約条件のもとでの政策の選択に際しての参照枠組みとしての社会主義思想の役割、(3) なされた選択を正当化する要請から生じた社会主義の理念そのものの変容、という観点から整理を行った。

また、ロシア革命期の政治史・経済史に関する研究書や文書資料集や社会主義・経済理論・経済思想史に関する文献資料を購入し、歴史的・文献的知識の補強をはかった。

4. 研究成果

(1) ロシア革命に関わる社会主義思想のうち、革命の初期（とりわけ二月革命から十月革命直後の時期）にマルクス主義的社会主義以上に大きな影響力をもったナロードニキ的社会主義について研究し、同時代の経済学者ボリス・ブルツクスによるその包括的な批判の紹介と検討を論文「二月革命期におけるブルツクスの土地改革論」にまとめた。ナロードニキ的社会主義の唱える「土地不足」論とそれに基づく無償での土地均分論の根本的な問題点は、非市場的・自給的な農民経営を理想視するために、国民経済発展（およびこの過程における工業都市への人口移動を伴う職業分化）の観点を欠いているという点にある。ブルツクスはこの点を的確に指摘しながら、小農民経営の発展を国民経済全体の資本主義的工業化過程の有機的一环と位置づける独自の土地改革構想を提示している。非市場的・自給的な生産を理想視する思潮は今日の社会運動の中にもなお根強く存在することからみても、ブルツクスによるナロードニキ的社会

主義の批判は大きな意義を有している。

(2) ソヴェト体制と社会主義思想の関係について検討し、ボリス・ブルツクスがこの主題について行った晩年の考察の紹介と検討を論文「社会主義とソヴェト経済」にまとめた。この論文では、ブルツクスの見解をたどりながら、ソヴェト体制が社会主義に託されていた理想からかけ離れたその非効率性や非人間性にもかかわらず、生産手段の社会化と計画経済（市場ではなく指令が調整において支配的となる経済）の確立というマルクス主義が掲げた2つの大きな変革を実現した点において、マルクス主義的社会主義の実現形態とみなしうるものであることを明らかにした。

(3) 経済計算論争以前の時期における社会主義批判の諸潮流に関する研究、具体的にはロシア革命に先立って『資本論』第1巻の刊行直後の1874年にA.シェフレとP.ルロワ-ポーリュによる社会主義批判を検討し、以下の点を明らかにした。(i) シェフレが1874年に刊行した『社会主義の真髓』は、社会主義経済の概要をはじめ具体的に示した著作であり、彼が描いた社会主義像は、ロシア革命までの40年にわたり社会主義をめぐる議論の共通の前提をなした。また、彼は自らが理念化した社会主義経済について綿密な批判的検討を行い、労働価値を評価・計算単位とする经济管理について、需要変化への対応や人々の経済的動機という点から重大な疑問を提起した。(ii) ルロワ-ポーリュの『集産主義』は、シェフレを出発点としつつ、(a) 価格と利潤という導き手を欠くため、国家による生産管理は需要から乖離した不効率なものになる、(b) 国家による生産管理に伴う巨大で複雑な官僚機構は、改善と革新への動機を弱め、その機会を極度に制限する。(c) 生産決定の権限が国家に集中することにより、需要の国家への全面的従属が生じる、との主張を展開した。両者はミーゼスに先んじて、資本主義体制との比較における社会主義体制の批判的検討という問題領域を切り開き、これを一挙に高い到達点にまで導いた。これまでほとんど忘却されてきた両者の研究を発掘し、それらが以上のような

重要な内容をもつことを明らかにしたことは、本研究の重要な成果の一つである。

(4) ロシア革命直後の社会主義をめぐる理論状況の検討を通じて、ドイツの経済学者L. ポーレが1919年に刊行した『社会主義と資本主義』を発掘し、次の点を明らかにした。(i) 比較経済体制論の歴史において、同書は社会主義の理念の理解や資本主義の立体的把握（とくに企業家の役割の考察）の点で、同時代のミーゼスやブルツクスの貢献とは区別される、独自のすぐれた価値を有する。(ii) ポーレによる議論は、シェフレやブルツクスと同様に、ルロワ-ポーリユーやミーゼスなど市場の自由を絶対視する立場ではなく、資本主義の内部での改革について積極的な立場からの社会主義批判の系譜に属する。(iii) 社会主義の根本的思想が、個人の生存を個人の自己責任とするのではなく社会的に保証することにあり、生産手段や労働に対する国家の支配・統制はそのための手段という性格をもつというポーレの理解は、思想としての社会主義を歴史的にとらえるうえでも、重要な視点を提示している。これらの評価をふまえて、さらに次の点を指摘した。(i) 生存の保証と生産手段の国家管理との結びつきの間には、マルクス主義が主張し、シェフレもそう考えたような論理的な必然性は存在しない（資本主義の枠組みの内部でもそれは可能である）、(ii) 現実の社会主義では、革命後に生じた激烈な政治闘争の論理により、生存の権利が搾取者の生存権の否定に反転してしまい、生存権の思想はかえって後退した、(iii) そのうえに、ソヴェト経済の確立過程を通じて、生産手段の国家管理がしだいにそれ自体として社会主義と同一視されるようになった、(iv) 生存の社会的保証という原点に立ち帰り、生存により豊富な内容を与えることによって、社会主義の理念における価値あるものを現代的に再生できる可能である。これらは、社会主義をめぐる従来の議論に、歴史と理論の両面で新たな研究課題を提起する意義をもつ成果であると考える。

(5) 論文「置塩経済学思想と方法」におい

て、マルクス経済学と社会主義思想の創造的遺産の一つである置塩信雄の経済理論の検討を行い、その客観主義的分析手法と独自の社会主義構想の意義と限界を論じた。

(6) 社会主義思想の史的展開を、実証的認識、規範理論、運動・闘争の三つの側面から考察し、(i) 初期社会主義思想が、生存の権利という二つの規範を追求するものであったこと、(ii) マルクスが社会主義を理想ではなく歴史的必然に置き換える理論的転換を遂行し、それに基づいて、生産力発展の促進および階級闘争の勝利をメタ規範化したこと、(iii) レニンがマルクス主義を、前衛主義、徹底した反規範主義、反帝国主義の世界革命論という三つの面で独自に発展させたこと、(iv) 世界革命の挫折により、ロシア革命以降の社会主義国は、国内での急速な生産力発展の実現に革命の歴史的正当性を求めたこと、(v) 労働義務規範の追求は市場・資本主義の否定と結びついて否定的な帰結をもたらしてきたが、発達や成長の権利をも包含する規範としての生存権の追求は、まだその歴史的な役割と可能性を失っていないこと、を明らかにした。これらについて、経済論学会大会の共通論題として報告し、その内容を論文「社会主義の過去と未来」として公刊した。また、論文「ソ連社会主義の経験と教訓」において、ソ連社会の否定的特質の多くが、生産手段の私的所有の破壊（およびその背後にある労働義務規範の一面的な追求）にあること、現代社会の変革を志向する勢力の中に、こうした破壊に結びつく古い型の資本主義批判・利潤批判が残存していることを指摘した。

以上の成果は、従来の社会主義論における規範的見地の暗黙化をたんに指摘するだけでなく、その原因と実践的帰結を、20世紀社会主義体制の歴史的脈に即して解明しようとするものである点で、独自の意義を有していると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

森岡真史, 社会主義の過去と未来 科学・闘争・規範, 季刊経済理論, 査読なし, 48巻1号, 2011, pp. 26-38

森岡真史, ソ連社会主義の経験と教訓, 経済科学通信, 査読なし, 125号, 2011, pp. 43-49

森岡真史, 置塩経済学の理論と方法, 季刊経済理論, 査読あり, 47巻2号, 2010, pp. 89-100

森岡真史, ポーレの比較体制論, 立命館大学国際研究, 査読なし, 22巻3号, 2010, pp. 219-244

森岡真史, 小島修一『20世紀初頭ロシアの経済学者群像』, 比較経済体制研究, 査読なし, pp. 47巻2号, 2010, 91-95

森岡真史, 経済体制論争の開幕 シェフレとルロワ-ポーリュー, 立命館国際研究, 査読なし, 21巻3号, 2010, pp. 269-300

森岡真史, 二月革命期におけるブルツクスの土地改革論, ロシア東欧研究, 査読あり, 36号, 2008, pp. 159-172

森岡真史, 社会主義とソヴェト経済ブルツクス晩年の思索, 立命館国際研究, 査読なし, 20巻3号, 2008, pp. 197-224

〔学会発表〕(計3件)

森岡真史, 置塩経済学の理論と方法, 経済理論学会全国大会, 東京大学, 2011年11月21日

森岡真史, 社会主義とは何であったか/何でありうるか, 経済理論学会全国大会(共通論題報告), 関西大学, 2010年10月24日

森岡真史, 経済体制論争の開幕 シェフレとルロワ-ポーリュー, 比較経済体制学会秋期大会, 立命館大学, 2009年10月24日

〔図書〕(計1件)

西部忠・吉田雅明編, 進化経済学基礎, 日本経済評論社, 2010(うち, 西部忠とともに「資本主義」の部分, pp. 178-189

を担当)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森岡 真史 (MORIOKA MASASHI)

立命館大学・国際関係学部・教授

研究者番号: 50257812